

は軽快群に比べその低下率は著しかった。

8. Comprehensive asthma inventory (CAI)の検討
心理的因子の関与度をみる目的で CAI を施行した。重症例は軽快群に比し score は高いものがあり神経症的傾向が高くみられた。薬物に対する依存性が高く適応力の低下がみられた。

9. 学業、職業に及ぼす影響

思春期、青年期の重症喘息が学業、職業に及ぼす影響は大きく、頑固な登校拒否を呈した症例が2例あった。特殊な職業に従事し喘息が悪化したと思われるものに家

業のそばやに従事、パン製造業に従事、印刷業によるインクのおいなどにより喘息が悪化した症例があった。

〔まとめ〕

思春期、青春期における気管支喘息につき二、三の検討を行った。免疫学的に血清 IgE 値は高値を示すものが多く IgG-FcR+ T 細胞百分率は低値を示していた。アセチルコリン吸入閾値濃度は低く EIB が著明であった。心理的には喘息の経過が長いところから薬物依存度が高く神経症的傾向が強くと学業に及ぼす影響は大であった。

ステロイド依存性患児の依存化要因の検討

1. 全国集計について

国立療養所南福岡病院小児呼吸器科 西 間 三 馨

〔はじめに〕

ステロイド依存性の気管支喘息患児(以下 S.D)の依存化要因を検討するため、まず、全国にどの位の S.D が存在するのかを全国アンケート調査で昭和56年夏に施行した。

〔対象、方法ならびに結果〕

対象は、大学病院75施設、200床以上のベッド数を持ち、小児科のある国公立病院249施設、計324施設である。回答数は、大学病院53(回収率70.7%)、国公立病院147(同 59.0%)、計200(61.7%)であった。S.Dありの回答を寄せた大学病院は2施設2例で、ステロイド投与中、離脱中、離脱後の死亡は6施設10例であった。この2施設に対して、第2次アンケート(さらに詳細な個人表)を求めた。国公立病院のS.Dは18施設39名、同じく死亡13施設28名、個人表回収12施設18例であった。総計では、20施設41例のS.D、19施設38例の死亡、個人表回収は14施設20例であった(表1)。

表1 ステロイド依存性患者のアンケート集計状況

発送先	発送数	回収数(率%)	S.D数	死亡数
大学病院	75	53(70.7)	2/2施設	10/6施設
国公立病院	249	147(59.0)	39/18施設	28/13施設
計	324	200(61.7)	41/20施設	38/19施設

S.D: steroid dependent

また16才以上で、小児科でケアをしている S.D 患者の個人表も9例回収された。

15才以下の S.D の年令、性別は表2のようになり、3~15才(平均11.2±4.3才)で、男13例、女7例の計20例である。内訳は、身長:100~169cm(136.6±

表2 ステロイド依存性患児の年令・性(全国集計)

年令(才)	男	女	計
0	0	0	0
1	0	0	0
2	0	0	0
3	1	1	2
4	1	0	1
5	0	0	0
6	0	0	0
7	1	0	1
8	1	1	2
9	0	0	0
10	1	1	2
11	0	0	0
12	0	1	1
13	2	1	3
14	1	0	1
15	5	2	7
計	13	7	20

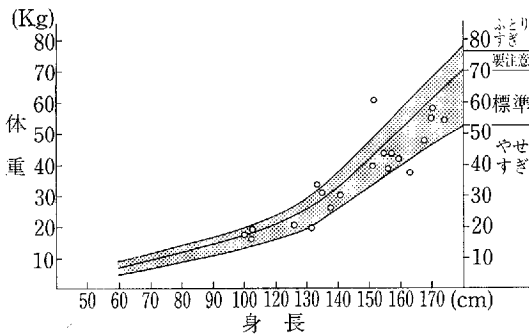


図1 肥満と「やせ」の判定図からみたステロイド依存性喘息患児19例の体位 (昭和52年度 学校保健統計より算出)

22.1 cm), Fanconi's index: 67.5~119.5% (94.0±15.1%), 体重: 17~60 kg (37.6±14.6 kg) であり, 昭和52年度の学校保健統計でみると, ふとりすぎ: 2例, やせすぎ: 1例で, 他は標準範囲であった(図1)。

ステロイド依存性になってからの期間は, 2か月~7年 (27.3±27.6か月) であり, ステロイド依存性となった理由として考えられるものとしては表3のように, 「重症なため, やむを得なかった」がほとんどであった。

ステロイド剤投与方法は, 連日投与が6例, 隔日投与が14例であり, 使用薬剤は prednisolone 17例, methylprednisolone 1例, betamethasone 2例であった。また, ACTH, insuline 負荷による副腎皮質機能予備能の検査の行なわれているものは9例であった。

ちなみに, 16才以上のSD 9例の内訳は, 年齢: 16~25才 (平均19.9±3.3才), 性別: 男6例, 女3例, 身長: 147~172 cm (160.0±8.0 cm), 体重: 42~80 kg (51.9±12.4 kg), ステロイド投与期間: 6か月~15年 (62.2±64.9か月), 依存性になった理由: 表3における a が6例, Cが3例, 投与方法: 連日投与3例, 隔日投与6例, 使用薬剤: prednisolone 8例, triamcinolone acetonide 1例, 副腎皮質機能検査施行例: 7例であった。

【考察】

小児気管支喘息の低年齢化, 重症化がいわれているが, この全国アンケート調査のステロイド依存性からみると, それは窺えなく, 重症発作の多発する10才前後に一致し

表3 ステロイド依存性になった理由(重複あり)

	例数
a. 重症のため, やむを得なかった	19
b. 年齢が低く, 他の薬剤が有効でなかったため	4
c. 安易なステロイドの頻用	3
d. triamcinolone acetonide の筋注使用のため	1

た年齢 (平均 11.2±4.3 才) であった。また, 男女の比率も 13:7 と, 小児気管支喘息の性差と同様であった。副腎皮質ホルモンの連続投与による副作用として, 一般に骨発達遅滞, 肥満があるが, Fanconi's index は平均としては 94.0% とやや低値で, 80% 以下を示した者は 4 例 20% であった。また肥満傾向は認められなかった。この理由としては次のことが考えられる。

1. 多くの症例が prednisolone の隔日投与であったこと。
2. ステロイド依存性になってからの期間が比較的短かったこと(平均27.3か月)。
3. ステロイド剤の1回投与量が少ないこと。

などである。

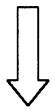
なぜステロイド依存性になったかは, 多くのものが, 「重症なため, やむを得なかった」というものであり, 使用方法に問題があると考えられる例は少なかった。これは, 16才以上のSDの1/3は「安易な連用」が原因と考えられていることとも考え合わせると, 最近の喘息治療の際のステロイド使用に対する認識の深まりが大きく関与しているであろう。

また, このアンケート対象が, 二次病院, 三次病院としての機能の強い大学病院, 国公立病院であったので, 使用のまずさによるSDの患者の多くは離脱できたため, このアンケートのような1時点でのものには上ってこなかったと考えられる。つまり, 逆の見方をすれば, 隔日投与, theophylline RTC 療法, BDI, DSCG, 施設入院等をうまく組み合わせて離脱を試みれば, 多くのSDは離脱できることを示している。

また, ステロイド投与中, 離脱中, 離脱後の死亡の経験が多かったことは, ステロイド依存性患者は, 診療上, 十分な注意が必要であることを如実に物語っている。さらに詳細な解析が必要であろう。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



〔はじめに〕

ステロイド依存性の気管支喘息児(以下 S.D)の依存化要因を検討するため、まず、全国にどの位の S.D が存在するのかを全国アンケート調査で昭和 56 年夏に施行した。